

歴史探訪

クラブ! 其の120

History Inquiry Club



文化財課 ☎23局 3635
FAX 22局 3811

太田洋愛と太田桜

皆さんは、田原市出身の太田洋愛という画家をご存知でしょうか。洋愛は、日本のボタニカルアートの草分け的な存在です。ボタニカルアートとは、図鑑に掲載するような植物画の美術作品のことで、中世ヨーロッパにおいて、植物学者が草花を記録するために細密に描き始めたのが始まりといわれています。絵の技術はもちろんのこと、植物を科学的な視点で観察、分析できる力も必要です。



▲洋愛が描いた太田桜(成章高校蔵)

太田洋愛(1910~1988)は本名を保(たも)といい、田原町で生まれ、小さなころから絵を描くことが好きな少年でした。小学生のころ、洋愛はお寺に修行に行きましたが、お供え物を包む紙をもらっては、仕事の途中に写生をしていました。もちろん仕事がおそろそかになるので、和尚さんに怒られました。しかし、あまりにも見事な出来栄なので、和尚さんは、本堂に飾る観音様を描かせたといいます。このエピソードを聞いて、室町時代の偉大な画家である雪舟が、寺の仕事をさぼっては絵を描くので和尚さんにしかられ、涙でネズミの絵を描いて認められたという話を思い出しました。

洋愛は、成章中学校を卒業後、満州教育専門学校植物学教室で2000年前のハスの種を発芽さ



▲成章高校に植えられた太田桜の木

せたこと
で有名な
「はず博士」大賀一郎博士に師事し、植物画を学びました。
終戦後、不幸にも

4年間もシベリアに抑留され、きつい労働や満足でない食事に苦しみましたが、少しの時間を見つけては絵を描きました。そしてその絵のうまさの評判となり、ロシアの将校に頼まれては草花や肖像を描き、かわいがられたそうです。洋愛は、絵のうまさはもちろんのこと、その情熱で、いつの間にか周りの人まで取り込んでいったのです。

帰国後は、いったん田原に戻りますが、絵の勉強のため東京に出て、理科の教科書や園芸のテキストの挿絵を描きます。春になると、大好きな桜を描くために日本各地を巡りました。ある時、洋愛は岐阜県白川村本覚寺にある大木の八重桜を、いつ

もの通り注意深く観察しながら描いていました。その桜は、うすいピンク色の八重桜でしたが、めしべが多く今まで見たものと違うことに気付きました。洋愛は新種の桜を発見したのでした。この新種の桜を大井次三郎博士は、発見者の洋愛を称え「オオタザクラ」と命名しました。誰も気付かなかった新種が、画家によって発見されたのでした。

植物を愛し、それを鋭い観察によって絵に仕上げる。太田桜の発見も、洋愛だからこそできた当然のことだったかもしれません。洋愛は、『日本桜集』『太田洋愛画集』をはじめ数多くの画集を出版しています。この太田桜は、洋愛の母校、県立成章高校の創立80年を記念して植えられています。(増山)

今月の「表紙」

▼2月に開催した「市政ぴーあーる講座」のガーベラ狩り体験で訪れた温室の中は、まるでお花畑。春のお花畑の中を散策するように、ガーベラの花を選ぶ皆さんの顔にも、とてもステキな笑顔が咲いていました。田原市の花きの産出額は日本一。まさに花いっぱい!の常春のまちですね(〇)

【表紙の写真】ガーベラ狩り(高松町)